

## 北河内地域における生活環境と 環境デザイン原理に関する研究

Research on Man-environment and its Environmental  
Design Principle in Kitakawachi Region

主任研究員：谷口興紀

分担研究員：山村 悟、植松暉子、星野 暁、奥 哲治、中川 等  
川口将武

この研究は、還路（折り返し点通過）段階に入ると観じてから、3年になる。来年度（平成12年度）で一応の区切りを付ける予定であるが、平成3年にはじまったこの研究を振り返ると、この9年間の社会情勢は、様変わりをしている。我が国の社会経済が冬の時代に入り、大学もまた冬の時代に入っている。しかし、マイナスの変化だけでなく、インターネットに象徴されるIT革命は、新しい可能性を開くという点において明るい時代をもたらすと思われる。インターネットは、地球上に分布するWEBサーバマシンに電子情報的にアクセス可能にする。いわば、物理的に世界の果てまで電子路が通じており、ユーザーが短時間で往き着き、バーチャル情報を得て、今・此处に還ってくる。コンピュータが「電脳」ならば、インターネットは、「到世界電網」と呼べるであろう。

往還という、古くて新しい、この動的なかかわりを平板化して「やりとり」と言うと、その典型は、対話である。「到世界電網」（インターネット）は、内部的に、電子信号のやりとりによって情報チャンネルが開かれる。

この還路的観点は、それぞれの場において様々な様相を示すが、ここでは、否定的契機と解して、試みに「中間報告総括」の中から否定的契機を示すキーワードを取り出すと、「長期の年月にわたらないと実現出来ない事柄」（平成3・1991年度）、「人間が人間になる」（平成4・1992年度）、「見えないが故に限界がない」（平成5・1993年度）、「生死」（平成6・1994年度）、「存在するものの外に立つ」（平成7・1995）、「あらしめているもと」（平成8・1996年度）、「非日常的な宗教的なもの」（平成9・1997年度）、「『物』を物体ではなく、本来の『物』として」（平成10・1998年度）であるが、これらの契機から、今・ここにへの立ち戻りによって研究がより深まりを増すであろう。

このような否定的契機を研究において媒介させる第1の理由は、この研究が「長期的」ということにある。研究が長期間にわたるということは、その間に研究状況が変化することである。変化の波の一つは、例えば、平成3・1991年度に挙げられている「国際化」「情報化」「高齢化」というキーワードのうち、前二つは「IT革命」や「インターネット」（到世界電網）に置き換えられ、残りの一つには、「少子化」が加えられねばならないこ

となどである。

研究は、本来、普遍的であり、超時間的であることは、地域研究においては、成り立たない。そもそも北河内地域の基盤の大部分の平野部は、かつては河内湾（6000年以前）であったことが知られており、その名残は、江戸時代中期に埋め立てられた深野池にまで名残をとどめている。したがって、変化や変化率の小さなものを明らかにし、それをベースに「あるべき地域の姿」を模索し、提案するためには、当該地域に即して、「これではない」を契機として、初発の発想がなされるが、知覚と発想との往還において発想されるものには、認識論的アライ（不在証明）がある。それを突き崩し、「在るもの」にもたらしめるには、「ないこと」に即した側面からの研究の必要がある。この点が否定的契機を媒介させる第2の理由である。

上述の観点を踏まえつつ、以下に今年度の個々の研究をとらえる。「ひらかた大菊人形」の報告（山村）は、今風に言う奥村プロデューサの発想を跡付けて、菊花と人形技術とのリンクにより、永続的でない生である「花」を使用し、それを無生の、または、生の象徴物である人形に植え込むが故に、年々歳々新しいというイベントの実現に関するものである。そこには、年々歳々祭るが故に、物事が新しくなるという祭りの特性と呼応するところがある。「河内木綿風呂敷」の報告（植松）は、我が国独自のマルチラッピング形式であり、リサイクル可能な生活物品についての、日常性（け）と非日常性（はれ）の観点からの、諸種の機能を含めたデザインの報告である。「教育環境における樹木の教育行為的意義」の報告（奥）は、悪しき特性としての「現代」を浮かび上がらせると共に、その反語としての「神的」から、還路すれば、既にして良き恣意の路を経ていることに気付かされる。「泉佐野市に設置された環境オブジェ」の経年変化報告（星野）は、水道水に含まれる塩素の、作品への影響に端を発し、一見技術的な問題に見えることの深層に作品とその部分との関係の問題を含み、それは、地球環境と個人の生活環境との関係という現代の環境問題を考えることに通じる。「庶民住宅の家族構成の経年的変化」の報告（中川）は、「建築生産の史的研究」（川上）を踏まえて、僧侶により作成された江戸時代中頃の住民の戸籍と宗教一覧より伺い知ることができる限りにおける、当時の住生活の実態を明らかにしている。この頃は、全国的に、人口の伸びが一段落ついた時期であり、これらの家系が現在も存続しているかを確認することは、還路することになる。「水路と生活環境」の報告（川口）は、子供達は、遊び場をいかに確保しているかの報告であり、住民にとっての「良好な環境」の分節に向けての取り組みであるが、少子化が進んで遊ぶ子供がいなくなるときどうなるかは、未来から、未来への還路である。「情報ネットワークノード」の報告（谷口）は、この中間報告のWEB頁化と全文検索システムの構築に取り組んだものであり、この研究の総合性を高める手段を与えている。今年度までの進捗状況を表-1に示す。

既（\*）・継続分担研究テーマ

1) 川上 頁：北河内地域における建築生産に関する史的研究（\*）

- 2) 山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究
- 3) 植松曄子：北河内地方におけるクラフトと生活環境空間について
- 4) 谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究
- 5) 星野暁：泉佐野市総合文化センターアート計画を土台とした環境オブジェ制作研究
- 6) 竹嶋祥未：大阪府下におけるデイサレビスセンターの類型別動向と室構成（＊）
- 7) 竹嶋祥夫：北河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究（＊）
- 8) 榊原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の繰作モデルに関する基礎的研究（＊）
- 9) 奥哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体事例（北河内地域）の調査研究（＊）
- 10) 奥哲治：建築的関心からする地域環境のもつ教育的可能性に関する基礎的研究
- 11) 中川等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
- 12) 浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究（＊）
- 13) 川口将武：北河内地域における水路と生活環境に関する研究

表-1平成3・1991年度～平成11・1999年度研究進捗状況（表枠組：1993年度一部修正）

凡例英小文字＝研究員名、数字＝西暦年末尾

環境領域区分 学術の区分	理念・ロゴス 作業・ワーク	カテゴリー以前・非表象	歴史 (通時的) 未来史 生活史 建築史 集落史 都市史 産業史 その他	個別テーマ (共時的)				
				場所分節		地域分節	地球基盤	情報分節
				生活分節	空間分節			
学 系	資料収集	k4	e1 b1 c4 e2 b2 d2 d3 f3 j3 b4 c5 d5 d6 c6	h1 j2 i3	i1 j1 j2 h2 e4 f5 i5 i6	h1 e1 h2 e2 j3 k4 f5 k5 k6 j8 k7	h1 e2	e1 j1 e2 j2
	整理・解説		b1 b2 d2 e2 f3 b4 c4 j4 c5 d5 d6 c6	h1 j2	i1 j1 i2 j2 h2 h4 i4 f5 i5 i6	h1 b1 h2 e2 h4 j4 k4 f5 j5 k5 k6 j6		
	調査・研究	e5 g6 g9	b1 b2 e2 b4 d4 c4 c5 j5 d6 c6 c9	d4 i4 e2 c7 c8 d8 d9 j9 i9	i1 j1 i2 h2 c2 c3 f4 h4 i4 f5 i5 h5 i7 j7 i8 j8 i9 j9 i9	b1 b2 c2 e2 j4 f4 k4 d4 h4 f5 j5 k6 c7 d7 i7 j7 k7 c8 i8 j8 c9 j9 i8 i9	d7	e3 e4 j4 k4
術 系	計画・提案	g5 g6			i1 i2 i4 i5 i6			e3 e4 e6 e9
	教育・養成		d2					e9

- 1) b:川上 貫：北河内地域における建築生産に関する史的研究（＊）
- 2) c:山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究
- 3) d:植村暉子：北河内地域におけるクラフト生活環境空間について
- 4) e:谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究
- 6) f:竹嶋祥夫：大阪府下におけるデイサービスセンターの類型別動向と室構成（＊）
- 7) f:竹嶋祥夫：化河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究（＊）
- 5) g:星野暁：泉佐野市総合文化センターアート計画を土台とした環境オブジェ制作研究
- 8) h:榊原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究

(\*)

- 9) i:奥哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体的事例(北河内地域)の調査研究(\*)
- 10) i:奥哲治：建築的関心から地域環境のもつ教育的可能性に関する基礎的研究
- 11) j：中川等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
- 12) k：浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究(\*)
- 13) l：川口将武：北河内地域における水路と生活環境に関する研究

## 北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究 谷口興紀（工学部）

先に、情報の1次元的形式としての文表現について、文を構成する要素の使用状態を、つまり、誰が、どこに、どういう語句を使用しているかという情報を容易に得ることができることを求めて、本研究中間報告のWEB頁化を試みた。それは、また、研究の公開の新しい手段を求めてであったが、その頃に比べて、社会におけるインターネットの普及と定着がめざましく、研究の公開を容易にする手段としての意義が高まっている。

研究上の利点として、インターネット上のWEB頁化することは、当該研究メンバーが、その頁間に「リンクを張る」ことにより、容易に相互の研究の関連性を「明示的に」考える手段を得ることが挙げられる。しかし、「リンクを張る」ことは、前年度までは、個々の研究者の恣意に任されていたが、今年度は、「リンクを張る」ことをより体系的に行う試みとして、全文検索システム(NANAZU)を使用して、平成10年度分までの中間報告全体のキーワード検索システムを作成し、新たにWEB頁に加えた。

平成8年度のWEB頁作成の時は、全体のWEB頁数を減らすため、1WEB頁は、個々の研究者単位ではなく、2～3人分を1頁としていたが、全文検索システムでの検索結果1頁の文章数が多すぎて、当該キーワード出現にたどり着くまでに手間がかかる。理想的には、一文単位に分離することが望ましいが、人手では困難であるだけでなく、実用的には、その前後の文も必要となるので、あまり細かく分けることにも問題があるので、現段階では、個々の研究者毎に1頁としている。ブラウザによる、当該キーワードの頁内検索機能を利用すれば、容易に当該キーワードを含む、特定の文にたどり着くことができる。全体の84WEB頁を一つ一つ開いて特定のキーワードを探す手間に比べれば、この全文検索システムの使いやすさは研究上のアイデアの展開や研究全体の整合性チェックという点から、共同研究の遂行やまとめの段階において不可欠なものとなるであろう。

このようなキーワードの出現に着目することの意義を考えると、第1に、文章表現に依拠した限りでの研究全体の整合性のチェックである。第2に、他の研究者の文の内容に触

発されて、自己の研究のまとめの推敲である。語句の意味は、辞書的意味をベースにしつつ、文という脈絡に置かれることにより、その意味が展開し、また、深まる。第3に、このようなことが、個々の研究者のところで行われることにより、研究全体のまとまりが、個々の研究者の自発的行為により、自ずから生成されることである。

実際に「織り」というキーワードで検索すると、ヒット数は、11である。その典型は、「河内木綿」に関する研究報告文であるが、別の研究報告文、例えば、「線の交錯部分が織りなして現れる同心円の一つ一つが、様々の秩序の体系を代表するとも読める。」この後者の文のテーマは、ある幾何学的図形についてであり、その様を「織物」に譬えての表現である。「河内木綿」と幾何学的図形をどう関連付けることができようか。言葉の上では、「譬え」としては容易であるが、実体の上ではどうであろうか。「譬え」はあくまでも「譬え」なのであろうか。物事の説明において、「譬え」は一つのやり方である。しかし、もしそれを「モデル」による説明にとらえるならば、表現の綾以上のものがある。論理学における体系の性質の研究における無矛盾性は、「モデル論的証明」による。つまり、その体系を「充足するモデル」が構成できるならば、その体系は無矛盾であると言われる。このことを踏まえると、「織り」をキーワードにして、そこで譬えられた幾何学的図形は、代替的に、さまざまな織り方の紋様に譬えられる幾何学的図形の可能性を示唆する。可能な幾何学的図形のおのおのについて、再び当該のテーマに戻って考え直すことができよう。このようなことが、研究を推敲することに資する。

平成11・1999年度加筆・修正WEB頁：<http://toki.edd.osaka-sandai.ac.jp/o-tanig/kkw/> 平成8・1996年度WEB頁：<http://www.edd.osaka-sandai.ac.jp/~o-tanig/kkw.html>  
(一部のWEB頁は、産業研究所報の中間報告をスキャナーにより取り込んだことによる読みとり誤差があり、完全には校正されていないので、お気づきの点をメールで頂ければ幸いです。  
E-mail：[o-tanig@edd.osaka-sandai.ac.jp](mailto:o-tanig@edd.osaka-sandai.ac.jp))

## 庶民造形としての菊人形と都市近代化の相関関係

山村 悟 (工学部)

1. 1991(平成3)年度からこの研究組織に参加、当初は「北河内地域における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究」の分担課題で大阪府守口、四条畷、枚方など各市の公園、駅前広場、公的施設の周辺、ニュータウン内を中心にパブリック・アート、環境造形の実態調査を行った。それと並行して、日本では歴史の浅い「公的空間の造形」の概念と今日的意義をさぐるため、戦後日本の「野外彫刻」史検証の作業をすすめ、まず小論『日本の環境造形—原点としての宇部市と神戸市・比較研究—』(『大阪産業大学論集』人文科学編79号、1993年5月)をまとめた。調査中、とりわけ関心を持った四条畷市・住宅都市整備公団共同造成の「パークヒルズ田原」については、造成中ふん

だんに出土した生駒石を素材に、内外8人の彫刻家を指名してニュータウン内各所に彫刻作品やベンチ、遊具などを制作してもらったユニークなケースとして「造形計画論」の教材や実習Ⅲの見学対象に活用している。

2. 上記課題の調査・研究を続ける過程で、枚方市の遊園地「ひらかたパーク」の秋の名物イベント「大菊人形」が地域発展に果たした役割と、菊花という植物素材によるきわめて日本的な庶民造形が、江戸・東京の都市拡大、近代化のプロセスで一時期、大衆娯楽の主役になった歴史的事実に関心を深め、「庶民造形としての菊人形と都市近代化の相関関係」の分担課題で1994（平成6）年度から「菊人形」の総合研究をはじめた。

3. 「菊人形」研究は、次のようなスケジュールでフィールド・ワークと資（史）料収集を重ねた。

- a. 「ひらかた大菊人形」の成立と以後の経緯、近年の実態。1910（明治43）年開通の京阪電気鉄道が沿線開発と旅客増の一手法として、興行師、園芸業者、人形師らに依頼して、同年秋、枚方市香里丘陵で始め、曲折を経て1949（昭和24）年から現在地で「ひらかたパーク」の中心催事として定着した。
- b. 各地の秋の「菊人形」を現地調査。一時全国で41カ所開催されていたのが、今では12市1町に減った。その内、尾道（広島）、武生（福井）、二本松（福島）、南陽（山形）、名古屋で聞き取り調査と資料収集ができた。
- c. 「菊人形」のルーツとされる江戸時代後期の巢鴨、染井、駒込など植木屋地区に関する記述を可能な限り一次史料で集める。菊花を飾り付けて人物、動物、構築物などを表現する「作り菊」「菊細工」は、文化年間の初め（1805年ごろ）に麻布・狸穴でその原型が現れ、文化5年には巢鴨、染井の植木屋50余軒が菊細工の趣向と出来映えを競った。ブームは3度の盛衰を経て明治8年ごろから東京・駒込の団子坂、明治末から大正にかけて両国の国技館で大人気となった。
- d. 明治20年代に名古屋・大須の「菊人形」興行と結びつくことになる愛知県高浜市吉浜地区の宗教的民俗行事「吉浜細工人形づくり」（1964年、愛知県無形文化財に指定）の史料収集と毎年5月8日の奉納行事などの調査。起源は1656（明暦2）年にさかのぼる仏教縁起とされ、1857（安政4）年からは稲わら、木の根、竹皮、松かさ、棕櫚、貝殻などさまざまな自然素材による細工人形を花まつりの仏像開帳にあわせて地元の二つの寺院に設置し、名古屋・熱田神宮の豊作祈願行事にも奉納してきた。
- e. 明治中期以後「菊人形」を大掛りな興行（見せ物）にした名古屋の園芸実業家、奥村伊三郎（「黄花園」主）の業績についての記述収集。奥村は明治23年、名古屋・大須の万松寺境内に広大な菊花壇を設け、吉浜細工人形の技能保持者たちを招いて菊人形制作の専門家に育て上げた。「菊人形」と「吉浜細工人形」の結びつきについては研究の初期、古老の記憶や伝聞などで断片的に知るだけだったが、愛知県中央図書館所蔵のいくつかの資料によって、園芸よりも興行に熱を入れた奥村「黄花園」が明治30年代の大阪・新世界、42年からの東京・国技館での「菊人形」開催に人材派遣、技術指導、さらには経営参加という形で強い影響力を持ったことがはっきりした。伝統的な細工人形の技能継承者が減る現在も、各地の「菊人形」に愛知県高浜市や刈谷市

など近在から菊師、人形師たちが招かれて出張している。

- f. 1999年夏から2000年夏にかけて、江戸中期以後の「花の名所」づくり、緑化政策と園芸熱、庶民の娯楽としての「花見」の定着、文明開化期の東京、名古屋、大阪などの盛り場、見せ物—まで視野を広げ、8代将軍吉宗が桜を植えさせた隅田川の向島両岸から飛鳥山、植木屋村だった巢鴨、染井、駒込などを調査して回った。今は園芸地区の面影を探すのもむずかしいが、豊島区立郷土資料館で園芸都市・江戸の実像を浮かび上がらせるいくつかの資料、研究紀要を得て研究を補強した。

## 北河内地域の生活者の環境と自然について

—河内木綿布の風呂敷について—

植松睦子（工学部）

河内木綿布は、製品として主に着尺（着物用の反物）・蒲団地・暖簾・旗・半纏（はんでん羽織に似るが、まちも襟の折り返しもなく胸紐も付けない衣服）酒袋・風呂敷数等に用いられた。平成9・10年度は・河内木綿布の主に着尺地・蒲団地の銘柄・模様・色調について考察した。平成11年度は庶民が用いた河内木綿布の製品の風呂敷について考察した。風呂敷の語源は広辞苑によると、「風呂に入る時には衣類を包んでおき・湯からあがった。時には足を拭うのに用いた布」と「物を包むのに用いた方形の布」と解説されている。つまり「敷くもの」と「包むもの」との2つの概念が含まれている。また風呂敷は、物の収納、運搬の機能にも関係があったと推察される。他の利用法として、「早風呂敷」と云って火災など緊急時に素早く重要な物を包んで持ち出す、泥棒が盗品を唐草文様の風呂敷に包んで持ち出す姿も風呂敷の機能を最大に発揮したものである。風呂敷の大きさは、その機能によって千差万別であるが、二巾もの、三巾もの・四巾もの、一反風呂敷がある。これは反物一反分を用いた大形のものである。

風呂敷の文様構成について考察すると、形態が正方形であるためこの制約の枠内で文様が構成される。つまりスカーフの文様と同様である。文様の構成について、

1. 定紋文様 定紋入り文様で、中央に大きく家紋が描かれている。
2. 絵画的文様 全体に絵画的風景文様を描かれたもので、装飾的なもの。
3. 旋回文様又は円形文様 文様には松竹梅・牡丹・唐草など植物系を用いて円形又は螺旋形に描いたもの。
4. 散開文様 風呂敷の上下、左右に関係なく布地全体に施された連続文様。
5. 天地対称文様又は左右対称文様 上下、左右対称の配置の文様。

次に文様の表現手法について

1. 自然文様 植物系 松竹梅・菊・楓・牡丹・唐草・草  
自然系 流水・波・雲
2. 吉祥文様 植物系 菊花・桐花・蕙・葵・牡丹花・松竹梅など。  
動物系 鶴亀・千羽鶴



### 熨斗文様

#### 3. 幾何学文様 麻の菜・籠目・網目・石畳・青海波・鱗・亀甲などの連続文様

先染めによる縞又は格子柄に対して、後染めの布は、優雅な曲線と直線の組合せで様々な文様を染められたため広く愛用されていた事が堆察される。

平成2年八尾「桃林堂」で行なわれた辻合喜代太郎博士収蔵による河内木綿布の風呂敷展では、家紋・松竹梅・熨斗・吉祥・風景の順で保存されており、日常的に使われた風呂敷はほとんど現存せず、冠婚葬祭用の家紋や、祝いの松竹梅・熨斗などの文様であった。今後、河内木綿布の文様について河内地方の特色のある色・柄について総合的に考察して行きたい。

### 泉佐野市総合文化センターの環境オブジェ制作、設置及び完成後の調査研究 星野 暁（工学部）

平成7年に始まる泉佐野総合文化センター・アート計画は、環境オブジェ「表層・深層」完成の平成8年を経て、平成9年より完成後の調査研究に入っている。設置後まる3年の時間を経過した現在、2年目より浮上した問題が昨年、今年と一層悪く進行しつつある。この認識を基に4年目は、早急に今後の対策を考えなければならないところに来ている。野外の設置という条件、それ以上に“水中設置”という条件が予想をはるかに越えて、解決し難い条件であったと中間報告せざるを得ない。

ではもう一度ここに至るまでの本計画の問題点を整理してみたい。水位30cmほどの浅く水のはられたプール状のスペースに設置するという特殊条件下での作品の強度他の問題で、アートプロデューサー側との協議の末、“黒陶”の色彩と質感を失いたくないという希望と作品の形状からくる高温焼成の困難さ、切れや歪みを回避したいとする黒陶焼成の使用。

次に、このアート計画は、当初流水経路が私のオブジェの設置されたプールを横切って計画されていたのに対し、変更が行われ、プールを迂回して滝となって地下駐車場に流れていく一本の経路のみになったことから、水が激んでしまい、底に水アカが溜まり易くなったこと。

第三に、作品に対して問題なのは、当初予想した苔の問題、もっとも苔は自然との調和の意味から肯定的に捉えられていたが、苔の問題とはべつに水道水に含まれる塩素からくると思われる黒の褪色であった。2年目から水位のラインが白く付き始めたが、丸3年経ったいま、水位の下の水中部分全体に褪色がきつく広がり、水上の部分と大きな色の隔たりを生じてしまっている。

以上、考えられる問題点とその結果である。現在の作品状況を正確に把握し、今後の対応策を検討してゆきたい。1年以内に修理方法も検討し、早急に対処したいと考えている。

## 建築的関心からする地域環境のもつ教育的可能性に関する基礎的研究 奥 哲治（工学部）

地域環境のもつ教育的な可能性について建築的に関心し、主に環境の建築的な構成（物的空間的場所的な構成）と、広義の教育的なことがらとの関係を問うてきた。その際、幼児教育の創始者であり、「Kindergarten（幼稚園）」の創設者であるF. フレーベル（1782～1852）の教育思想をとりあげ、「場所の構成」という視点から「Kindergarten」における「Garten（庭）」のありかたに、また、「物の構成」という視点から教育遊具である「Gabe（恩物）」のありかたに関心し、それらを通して、環境のもつ広義な教育的可能性を論ずる際の原理的な論点を探ってきた。本年度は、それらの論点のひとつの焦点になりうることがらとして、教育的な行為のモデルとしての「植物」（特に「樹木」）について検討した。

フレーベルにあっては、万物は“神的「生命」”のはたらきを離れて独立にそれ自体として存在する実体的なものではなく、そのはたらきの場とひとつになった個々の「生命」のはたらきとして「表現」されるものである。場の生き生きしたはたらきが万物の生命の表現を促し、また逆にその万物の生き生きした表現が場のはたらきを促す、そのような<万物>と<生命のはたらき>がお互いに動的に限定し合う開かれた関係から世界のありかたをとらえている点が、彼の世界観の特徴である。したがって、この世界観の上に展開される彼の教育論においては、教育という行為の成立は、万物の一員である人間の子どもを、先の動的な開かれた関係のはたらきの場に十全に参加させることができるかどうかにかかっている。ところが、このような世界観に反して、現代という時代は、“神的「生命」”といわれるようなことがらからは遥かに遠く隔たった時代であって、人間によって恣意的に表現されたもので世界がどこまでも埋め尽くされてゆく時代である。このことは、その恣意的なものによって、逆に、人間自身がどこまでも規定しつくされ、つくられて行くことを示している。フレーベルが、“神的「生命」”のはたらきと述べた“神的”ということがらは、一見時代錯誤的に聞こえるが、このような人間の恣意ということへの一つの明確な反語ととらえてみれば、逆に現代への多くの示唆を与えてくれる可能性をもつ。その示唆を読みとる際に、フレーベルが“神的”な教育行為を、身近な「樹木」の成育にかかわる多数の比喻や例示を用いて述べている点は、現代の私たちにとって実に好都合であり、環境の建築的な構成にも直接に多くの論点を提供してくれる。よき匂いと雰囲気をまとい、他を拒むことなく、黙って立ち続けるだけで、何もせず、人のさまざまな思いや夢を受け入れ続け、変わらなくはたらき続ける「樹木」こそ、“神的「生命」”のはたらきを具体的に私たちに経験させてくれる最も身近な建築的な構成物としての「個物」である。

## 北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究

中川 等 (工学部)

11年度は、川上貢『近世上方大工の組・仲間』(思文閣出版、平成9年)などにに基づき、今は失われた江戸時代中頃の北河内民家について普請資料から規模と間取りを把握した。また、それら規模・間取りが判明する民家の中で、ほぼ同時期の宗門人別帳により居住人数と牛数がわかる家を確認して、規模・間取りと家族構成を対照して考察を加えた。

普請資料によると、江戸時代中頃の北河内民家は、梁間3間半の建物がもっとも多く、最大は4間余り、最小は2間であった。梁間4間の民家では桁行8間が多く、梁間3間から3間半の民家では桁行6間から8間に集中していた。平面は土間と居室からなり、4間取り型、広間型、2間取り型などに分類され、規模の大小にかかわらず4間取り型が最多であった。近畿地方の中心部では、江戸時代初期にはすでに整形4間取りが成立していたと考えられているが、北河内でも数多く普及していたことが知られる。

規模・間取りがわかる民家の中で、宗門人別帳により居住人数と牛数が確認された家は現在6例。人数が最多だったのは門真一番下村の幣原九兵衛家で11人、民家規模は梁間3間半、桁行9間。最少だったのは北嶋村の重兵衛家で2人、梁間4間半、桁行8間。ほかは7人2例、5人2例、牛を1疋もつ家は3例、もたない家は3例であった。

下馬伏村の八右衛門家は、持高50石7斗で、宝永5年(1708)の普請願書指図によると、梁間4間、桁行9間の規模をもち、右半を土間、左半を居室とする広間型3間取りであった。「にわ」に面して梁行いっばいに「ひろ敷」を設け、その上手に「座敷」と「へや」を並べ、「にわ」の下手に「馬屋」と「かまや」を前後に配する。8年後の正徳6年(1716)の宗門人別帳によると、八右衛門は57歳、女房53歳、忰の四郎右衛門24歳、その女房20歳、同じく忰の源六2歳、娘のかね18歳、下女きわ12歳の、男3人、女4人の合計7人が住んでいた。8年前に逆算すると、源六はまだ生まれておらず、四郎右衛門は16歳でまだ未婚と思われるから、結婚を前にした普請であったと考えることができる。

北河内民家の伝統的な住生活から、各室の使われ方は「座敷」は接客、「へや」は就寝、「かまや」は炊事を中心とし、「ひろ敷」は食事をはじめ多機能な空間であったと推察される。また、正徳6年には牛を所持しておらず、宝永期には不明ではあるが、指図には屋内に「馬屋」が描かれている。畿内の村落では、一疋の牛を持ち合って共同保有する形態が多くみられ、また、かつて農繁期には大和から牛を借りてきていたと伝える家もある。このような慣習が江戸時代の北河内に一般的であったならば、牛の有無にかかわらず民家の普請で「馬屋」をつくるのが原則であったと考えてよいだろう。

今後、建築・古文書・住生活の調査事例を増やして研究精度を高めていく予定である。

## 北河内地域における水路と生活環境に関する研究

川口将武（工学部）

本研究は、都市における水環境に形成展開される景観を歴史的・自然地理的特性によって捉え、生活者である地域住民がそれらの空間といかに係わっているかを把握することから、北河内特に大東市における環境構造を探ろうとしているものである。

2年目の平成11年度は、地域住民の中の子供に焦点をあて、身近な生活環境における屋外での「遊び」の実態を把握し、その諸相を分析することによって地域の環境資源となりえる空間を探り出そうとした。ここでいう環境資源とは、大気、水、森林、野生生物などの自然的なものだけでなく、街並み、歴史的建造物などの人工的なものであっても、周辺と一体となって良好な環境を形成しているようなものならば含み、人々の生活に恵みを与える環境それ自体を資源としてとらえていこうとする考え方（「緑空間のユニバーサル・デザイン」（社）日本造園学会編、学芸出版社、1998）を参考としている。

研究の方法は、昨年度と同様の三箇・氷野地区の小学6年生を対象とし、「好きな遊び場所」調査として写真投影法を用い、ランク付けを行いながら遊び行動について回答するキャプション評価法によってアンケートを実施した。回収率は、98%であった。

屋外での遊びを好きと回答した子供は71.7%で、嫌いと回答した子供の15.6%と比較すると、56.1%と大きく上回っている点が注目できる結果となった。

地域内の好きな遊び場所として最も多かった公園（44.4%）では、遊具遊び・水のかけあいのような既存施設を利用する遊び、おしゃべり・休息・玩具を通した少人数で行動する交流的遊び、球技・スポーツ練習といった集団的運動、おにごっこといった集団伝承的遊びの4つに行動をパターン化できた点が興味深かった。また、次に指摘が多かった道路・路地（26.3%）では、駐車場や空き地といった民有地と接している場所や、行き止まりとなったT字路、折れ曲がった生活道路、修景水路と一体になった道路など視覚的に変化の富んでいる空間を挙げている点が大変興味深いといえる。

今回の調査によって子供達は、自宅あるいは友人宅、学校に隣接する空間や施設として道具や設備がきちんと整備された空間を指摘しているものが多い結果となった。このような「限定的な場所」でしか遊べない状況にあるのは何が影響しているのか探っていく必要があると考える。また、更に地域の環境資源となりえる空間を探り出すためには、「遊び」といった行動に限定せず、生活行動一般の中からアプローチしていく必要があるといえ、更に個人的なインタビューを重ねていく予定である。